

旭川医科大学基金

平成30年度活動報告書

Asahikawa Medical University Fund

Annual Report 2018 – 2019

ご挨拶

平素より旭川医科大学の活動にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。
本学は、1973年の建学以来、一貫して「地域医療に根ざした医療・福祉の向上」を理念に掲げ、「医師・看護職者の育成」、「研究の推進」、「地域医療の充実」のため、積極的に活動を展開してまいりました。その成果は、教育・研究・診療・社会貢献のいずれの面におきましても多大なものがあると自負いたしております。これもひとえに、地域の皆様のご支援の賜物と存じ、深く感謝申し上げます。

しかしながら、広大な北海道の医療を取り巻く状況には、医師の偏在に伴う地域間の医療格差や超高齢社会など、依然として厳しい課題も残されております。本学が皆様の期待に応え続けるためには、地域医療に貢献できる医療者や研究者の養成の拠点として、また、地域医療を支える中核病院として、今後、ますますの充実・発展を期していかなければなりません。

本学は、自らに課せられている役割・責任の重さを痛感し、教育・研究・医療・社会貢献のすべての面で一層の充実・発展を図り、今後も新たな挑戦を続けていく所存ですが、そのためには、より安定した財政基盤の確立も必要となってまいります。

そこで本学は、2016年10月に独自の「旭川医科大学基金」を創設し、地域の皆様に広くご寄附をお願い申し上げることいたしました。

本学は2023年に創立50周年を迎えます。さらにその先も見据え、地域の皆様に医療・福祉を通じて幸せで豊かな人生を送り続けていただくために、私共一同、さらなる努力を惜しまない所存でございます。何卒、「旭川医科大学基金」へのご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

旭川医科大学では、2004年4月の法人化を契機に、未来の教育・研究・診療の中核となる学生や若手研究者への支援を行うことを目的として「学術振興後援資金」を設立し、募金活動及び支援事業を行ってまいりましたが、創設後10数年を経過し、この「学術振興後援資金」の内容について見直したところ、その用途を学生や若手研究者への支援に限定しており、未来を見据えた地域医療に貢献できる医療者や研究者の養成の拠点として、また、地域医療を支える中核病院として、これからの地域医療の発展ためには、今まで以上の幅広い事業にも対応できるようにすることが肝要と考え、2016年10月に「学術振興後援資金」を発展的に改組し、新たな「旭川医科大学基金」を創設しました。

創設後は、2019年3月までの間に、7,700万円を超えるご寄附を賜りました。これもひとえに皆様方からのご理解ご協力の賜と深く感謝申し上げます。皆様のご寄附は、旭川医科大学基金運営委員会での審議・検討のもと、ご寄附の目的に沿って、これからの旭川医科大学での事業の支援に充てていくこととしております。

今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



旭川医科大学
学長 吉田 晃敏



旭川医科大学
学長補佐(大学基金担当)
原 渕 保 明

目次

01 ご挨拶

02 実績報告

04 事業報告

12 感謝の集いについて

旭川医科大学基金は、旭川医科大学における教育及び研究活動の充実を図るとともに、地域医療に根ざした医療・福祉のさらなる向上を目指すことを目的として、これまでの学術振興後援資金を発展的に改組し、平成28年10月に創設しました。旭川医科大学基金に対しまして、一方ならぬご理解とご協力を賜り深く御礼申し上げます。

■ 平成30年度収入

寄附受入総額	111件	8,968,000円
前年度からの繰り越し		69,489,291円
利息		701円
その他（過年度返納分）		6,834円
合計（A）		78,464,826円

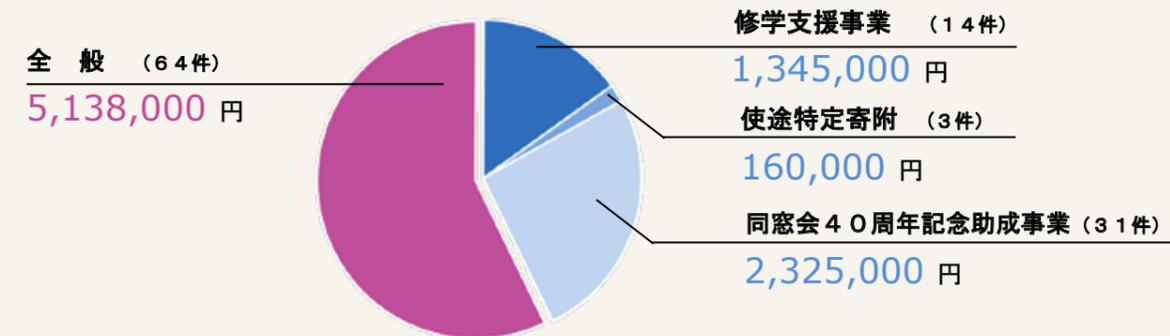
■ 平成30年度支出

支援事業		
●学部学生海外留学助成事業	2件	400,000円
●学部学生海外活動助成事業	0件	0円
●学部学生スポーツ国際大会出場助成事業	2件	237,373円
●大学院博士課程学生支援事業	1件	250,000円
●留学生支援事業	1件	360,000円
●研究活動助成事業	6件	3,000,000円
●国際学会等派遣事業	2件	488,450円
●卒業生に対する奨学資金貸与事業	1件	1,200,000円
事務費		1,208,099円
合計（B）		7,143,922円

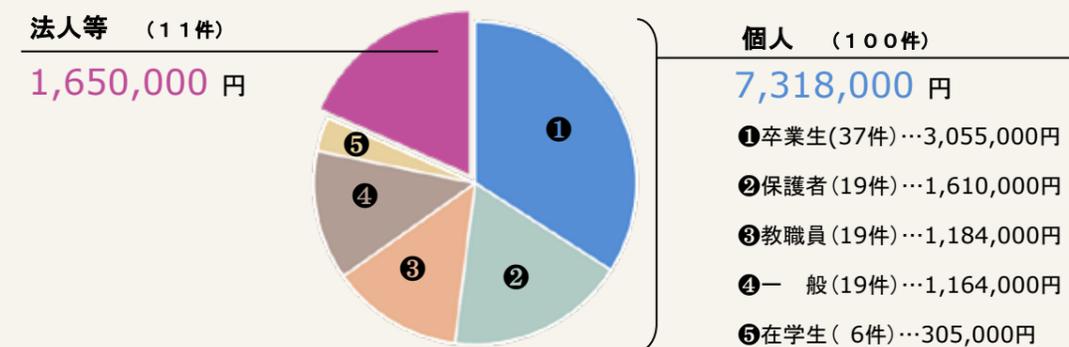
年度末 基金残高（A-B）・・・71,320,904円

■ 平成30年度旭川医科大学基金への寄附内訳

<寄附目的別>



<寄附者属性別>

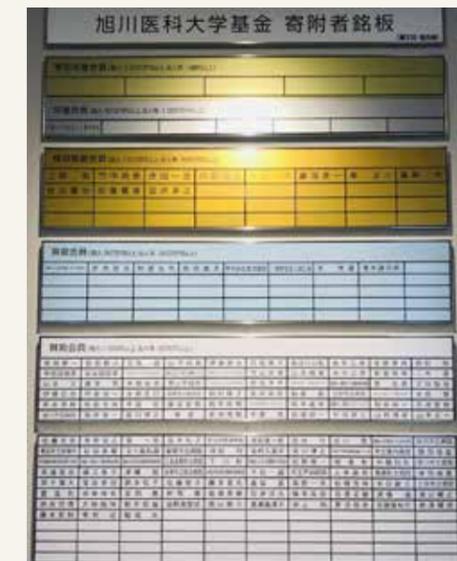


■ 称号件数

旭川医科大学基金創設以降にお贈りした会員の称号件数（累計）は以下のとおりです。

称号区分	寄附金額		個人	法人等
	個人	法人等		
特別栄誉会員	1,000万円以上	1億円以上	0	0
栄誉会員	500万円以上	1,000万円以上	0	0
特別貢献会員	100万円以上	500万円以上	11	0
貢献会員	50万円以上	300万円以上	5	3
賛助会員	10万円以上	50万円以上	97	33

（平成31年3月末現在）



▲ 会員の称号をお贈りした寄附者様のお名前を旭川医科大学病院レストラン「ななかまど」前の廊下に設置しています。

学部学生海外留学助成事業

本学学生の国際化を推進し、将来、国際社会の発展に寄与する医師及び看護師の養成に資するため、学部学生が外国の大学への留学又は外国の大学等での語学研修を行う経費を助成します。

支援を受けた学生の声



祝迫 恵爾
医学部医学科 第5学年（留学時）

🌐 留学先：アメリカ（ピッツバーグ大学）

アメリカの移植医療を 学んで

アメリカのペンシルベニア州にあるピッツバーグの University of Pittsburgh Medical Center の2カ所の病院にて見学を行いました。見学を希望した理由は、移植医療が進んでいるアメリカの医療システム・移植システムを知り、自分の知見を広げることによって日本の移植医療の現状について考えたいと思ったからです。

今回の留学では、外来、回診、各種カンファレンス、講演会、手術に参加させて頂きました。目的であった移植手術も数多く見学し、術前、術後の管理についても学ぶことができました。大学でも臓器移植について学ぶ機会がありましたが、アメリカの臓器移植の在り方を知ることにより、日本での臓器移植の在り方をより深く知る機会となりました。

今回の留学では医療者としてだけでなく、人として今後の成長の糧となる貴重な経験をさせて頂きました。今後も医学の勉強だけでなく、様々な背景を抱えた方々と接する中で、広い視野を持ち、柔軟さと芯の強さを備えた上で多くのことを学んでいけるように日々精進して参りたいと思います。

この度はご寄附により学部学生海外留学助成事業をご支援くださった皆様をはじめ、留学を支えてくださった方々に心より感謝申し上げます。



岡村 エミリ
医学部医学科 第3学年（留学時）

🌐 留学先：マルタ共和国

挑戦することの 大切さ

私が留学を希望した理由は、英語でのコミュニケーション能力の向上を図るため、スピーキングスキルを強化したいと思ったからです。

留学中は基本的に生活の全てで英語を使用するという環境で一月過ごすことができました。初めは、文化によるコミュニケーションの取り方の違いやシェアハウスでの生活に戸惑うこともありましたが、しかし慣れてくるとヨーロッパとアジアの違いについて出会った友人たちと英語で意見を交換することができ、とても充実した時間を過ごすことができました。

留学を通して、挑戦することの大切さを改めて学ぶことができました。挑戦することは楽しいことばかりではないですが、自分で限界の線引きをせず、今後も新しいことにチャレンジしていきたいと思えます。また、今回の経験を生かして英語の勉強を見直し、スピーキングスキルをより向上していけるよう努力していきたいと思えます。

今回学部学生海外留学助成事業を利用することができ、より早く留学を実現することが可能となりました。ご寄附によりご支援を頂き、このような貴重な機会を与えて頂き、心より感謝申し上げます。

学部学生スポーツ国際大会出場助成事業

本学学生が学業と両立してスポーツ活動を行い、日本代表として国際大会に出場する際の海外渡航に係る経費を助成します。

支援を受けた学生の声



高村 貴子
医学部医学科 第6学年（大会出場時）

🏃 開催国：イギリス
大会名：2018スカイランニング世界選手権
競技：スカイランニング

9月13日から15日にスコットランドで行われたスカイランニング世界選手権に参加しました。この大会は2年に1度開催され、カテゴリーが3種目にわかれており、私はSKYカテゴリー（累積標高：2,500m／距離：29km）に参加しました。

私のこの大会の目標は入賞ラインの10位までに入り、表彰台にあがることでした。しかし、世界選手権ということもあり、自分のベストを出せたとはいえず、10位までに入れるか自信はありませんでした。しかし、今までやってきた練習や応援してくださる方々のことを思い出し、順位よりも自分の納得のいく走りをすれば、必ず結果はついてくると信じ、スタートしました。スタートから信じられないくらい猛スピードで始まり、自分がつぶれるかつぶれないかギリギリのラインで上位集団に食らいつきました。ラスト7キロ地点まで10位集団で競っていたのですが、そこからスパートをかけ、抜け出し、目標にしていた10位でゴールすることができました。ゴールしたときは、10位に入賞できたことが信じられず、本当に嬉しかったことを今でも覚えています。しかし、表彰式でメダルやトロフィーをもらっている1位から3位の選手をみて自分も2年後はメダルをとりたくて心に強く思いました。2年度に向けて、これからも日々努力していきたいと思っています。

この度は、このような経験をさせていただけたことにとっても感謝しております。本当にありがとうございました。



奥田 景子
医学部医学科 第5学年（大会出場時）

🚣 開催国：スペイン
大会名：ICF World Cup Freestyle Kayak 2018
競技：カヤック

ICF World Cup Freestyle Kayak は2年に1度行われ、世界各国から代表選手やジャッジが集まって行われます。World Cup は規定により、2戦以上行わなければならないため、今回も2戦行われました。シニア部門は船の種類によってK-1、C-1、スコートの3部門に分かれており、私はK-1の部門で出場させて頂きました。

初めての国際大会では学ぶことも多く、たくさんの観衆の前で競技するという貴重な経験ができました。私の結果は、World Cup 第1戦、第2戦ともに予選敗退でしたが、準決勝、決勝と勝ち進み、メダルを獲得する日本代表の先輩方を目の前で応援することができ、今後の目標を見つけることができました。

また、滞在中は、憧れの世界のトップ選手との交流を通して、技やその練習方法、カヤックに対する考え方などたくさん教えてもらうことができたり、公式練習を含めて他の日本代表選手と共に練習を行い、自身の技術も向上することができました。

この度はご寄附によりご支援を頂きたくさんの刺激と学び、そして貴重な経験をすることができ、確実に今後の技術を向上させる大会となりました。心より感謝申し上げます。

研究活動助成事業

大学の若手研究者（大学院学生を含む。）の研究活動を支援します。

支援を受けた研究者の声

研究テーマ

HLA-B51陽性ベーチェット病における小胞体アミノペプチダーゼ1（ERAP1）の発現制御と発症機構の解明に関する研究

第二内科 / 医員 川幡 智樹

■ベーチェット病とは

ベーチェット病は、口腔粘膜のアフタ性潰瘍、外陰部潰瘍、皮膚症状、眼症状の4つの症状を主症状とし、まれに消化管や中枢神経に炎症を起こす慢性再発性の全身性炎症性疾患です。世界的にみると、日本をはじめ、韓国、中国や地中海沿岸諸国といったシルクロードに沿った地域に多くみられ、日本では約2万人の方が本疾患の特定疾患医療受給を受けています。男女差はありませんが、発症年齢は30歳代前半にピークを示します。

ベーチェット病の原因は未だに不明な点も多いのですが、特定の内的遺伝素因のもとに何らかの外的環境要因（感染病原体やそのほかの環境因子）が働いて発症すると考えられています。特に内的遺伝素因として白血球の血液型ともいえるヒト白血球抗原（HLA）のタイプが重要視されており、特にHLA-B51やHLA-A26が発症に関連があるとされています。

ベーチェット病は非常に多彩な症状を来し、重症度も様々なため全ての病状に対応できる単一の治療があるわけではなく、個々の患者さんに合わせて治療方針を立てていく必要があります。

■研究の背景

遺伝素因として、HLA-B51が最も強くベーチェット病と関連する遺伝子といわれていますが、アメリカ国立衛生研究所（NIH）、イスタン

ブール大学や横浜市立大学などが共同で行ったゲノムワイド関連解析（GWAS）により、HLA-B51など今まで知られていた関連遺伝子以外に20以上の新規関連遺伝子が明らかとなりました。その新規関連遺伝子のなかで、私は小胞体アミノペプチダーゼ1（ERAP1）に着目しました。ERAP1は、免疫応答や炎症反応の制御に際して提示される抗原ペプチドを適切な長さに切断する酵素ですが、ヒト主要組織適合抗原の中でもHLA-B51が関与する炎症細胞の活性化に密接に関わり、ベーチェット病の発症に寄与する可能性が示されている分子です。

従来、HLA-B51を持つベーチェット病患者のERAP1遺伝子の変異や多型とベーチェット病の発症の関わりを見出そうとする解析が行われてきましたが、一定の見解は得られておりません。一方で、ERAP1の発現制御機構についてはほとんど報告がなく、特にベーチェット病の罹患臓器でみられる炎症などの局所環境を反映させた発現制御機構の解析はほとんど行われていません。そこで私は、ベーチェット病に関連するHLA陽性の抗原提示細胞におけるERAP1発現制御機構を明らかとすることで、ベーチェット病の発症機構を究明することを目指しました。

■研究の手法と進捗

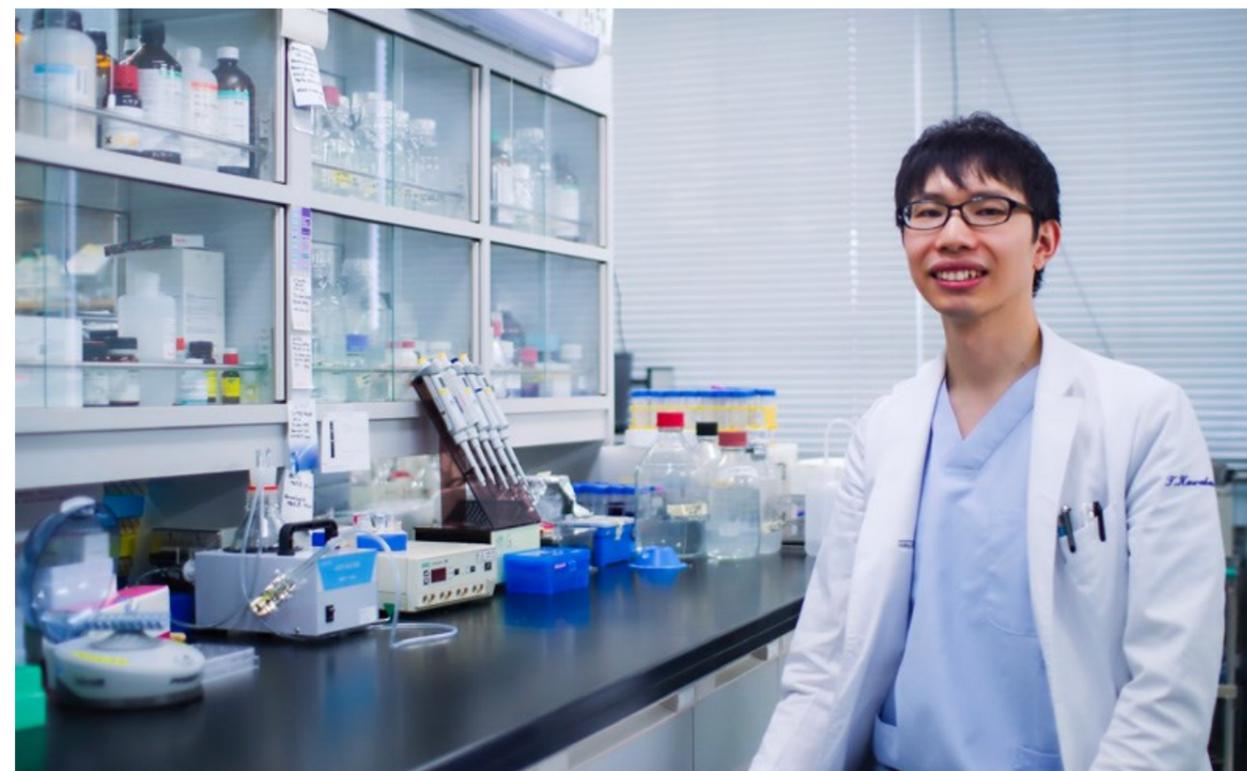
まず、私は理化学研究所細胞材料開発室（RIKEN BRC Cell Bank）が供給する健康日本人由来の不死化B細胞のうち、ベーチェット病と関連す

るHLAを表出する細胞を複数系統入手しました。ベーチェット病関連HLAとして過去の報告からベーチェット病の発症に強い関連があるとされているHLA B-51、A-26に着目し、B-51/A-26陽性、B-51のみ陽性、A-26のみ陽性、B-51/A-26陰性の細胞を使用しました。それらの細胞を低酸素環境や細胞表面抗原刺激（抗IgM抗体刺激）などの炎症と関連する細胞外環境に暴露した際のERAP1の発現変化を解析しました。細胞外酸素濃度など普遍的な環境のほか、炎症反応や免疫応答などの免疫系に固有の細胞外情報（細胞表面抗原刺激など）により制御されている事が判明しました。さらに、興味深い事に細胞外環境によるERAP1発現変化は、HLAタイプにより異なる可能性がある事が解りました。例えば、HLA-B51/A26双方陽性の細胞株で、他のHLA発現細胞株と比較して低酸素暴露によるERAP1の発現誘導が顕著でした。一方で細胞表面抗原刺激ではHLA-B51陽性細胞株でERAP1の発現が他のHLA発現細胞株と比較して増強していることが解りました。

すなわち、ベーチェット病における免疫応答、炎症反応の異常に特定のHLAタイプを背景としたERAP1の発現制御の破綻が関与する可能性があると考えております。

■今後に向けて

今回使用した細胞株は、健康人由来の細胞であり、ベーチェット病患者さんのものではありません。今



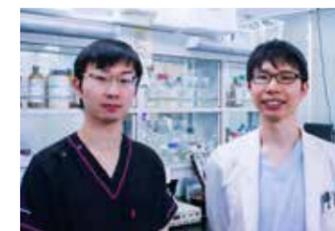
後は、北海道がベーチェット病患者さんの多い地域であることを活かして、ベーチェット病患者さん由来の細胞や試料を用いた解析を行いたいと考えております。また、B細胞由来の細胞株を使用していますが、さらにT細胞やマクロファージなどの抗原提示細胞を用いた解析へと発展させ、ベーチェット病の免疫・炎症制御異常の病態全体を対象とした解析を行う予定です。

ベーチェット病は、全身の臓器に障害を来しうる病気です。このような基礎研究がこれからの診療に活かされるよう、また、世界にむけて情報を発信できるよう精進いたします。

■寄附者様への謝辞

この度、旭川医科大学基金の趣旨にご賛同いただき、特にベーチェット病研究へのご理解、ご厚意を賜りましたこと心より御礼申し上げます。近年、ベーチェット病の治療が進化しています。従来の副腎皮質ス

テロイドに加え、生物学的製剤と呼ばれるTNFなどのサイトカイン阻害薬が使用できるようになり、治療に難渋していた患者さんも寛解が期待できるようになりました。しかしながら一方で、新規治療にも反応の乏しい患者さんが依然として存在することも事実であり、より効果的な治療法を開発する突破口として基礎研究への期待が高まっています。今回得られた研究成果をさらに発展させ、ベーチェット病の病態の更なる解明、新たな治療法の開発を目指して精進してまいります。ベーチェット病に苦しむ方々のお役に立てるよう努力を続けて参ります。



令和元年度研究活動助成事業にてベーチェット病研究を行う田中来先生と。



研究の様子。

研究活動助成事業

本学の若手研究者（大学院学生を含む。）の研究活動を支援します。

支援を受けた研究者の声



アミラ・アリム

大学院医学系研究科博士課程医学専攻

研究テーマ

白色脂肪細胞の代謝制御機構に及ぼす残留農薬の毒性評価とそのメカニズムの検討

■研究概要

2型糖尿病のほとんどは肥満に由来すると理解されてきましたが、残留性のある難分解性有機汚染物質への暴露によっても誘導される事実が次々と明らかになってきました。食物の残留農薬の摂取と糖尿病の関係が疑われてきましたが、実際の脂肪細胞においてどのような病態変化を生じるかについては確固たるエビデンスがなく、今後の検討結果に期待するところが大きい状況にあります。本研究の目的は、白色脂肪細胞の代謝調節機構に及ぼすベンゼンヘキサクロリド（HCH）の影響について、毒性評価を含めて詳細に検討することとしました。

■研究の進捗

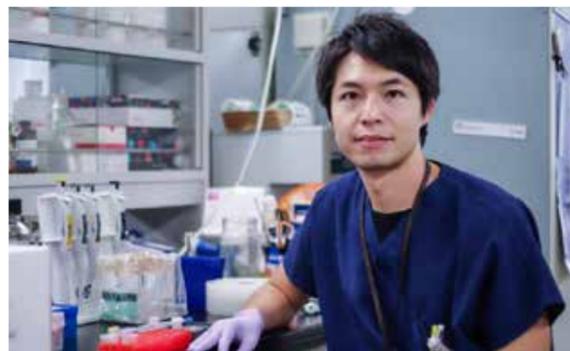
農薬ベンゼンヘキサクロリド（HCH）の添加は、細胞内への糖の取り込みを顕著に抑制しました。この状況下では、HCH処理により活性酸素（ROS）が生成されて、HCHという農薬をかけると糖の取り込み抑制する一つ原因になる事を検討し、得た結果のメカニズムを探っています。得た結果を国際学会などで発表しました。

■今後に向けて

本研究課題の遂行は、衛生学の範囲に留まるだけでなく、糖尿病の治療に対する臨床医学の領域へも新しい知見を提供することが期待できると考えています。本研究の遂行で得られた実験的エビデンスは、農薬と2型糖尿病との関係性を立証するだけでなく、医療技術を介した国際交流に対しても有益であると考えています。私は本研究の遂行を介して、母国の農薬型2型糖尿病の抑制に寄与したいと考えています。

■寄附者様への謝辞

旭川医科大学基金への大きなご支援を頂き、誠にありがとうございます。大学院生としてこんな素晴らしい研究費を申請するこんな素晴らしい機会を頂いて、心から感謝しております。



二井 光塵

周産母子センター / 助教

研究テーマ

早産児における最適な鉄剤投与法の開発

■研究概要

これまで私は早産児と鉄欠乏についての研究を行ってきました。その中で、早産児は投与された鉄が造血に上手く利用されていないことを見出し、その原因の一つが細胞への鉄の取り込みが悪いことにあるのではないかと考えました。本研究では早産児における鉄利用障害の原因解明のため、赤芽球系細胞の鉄の取り込みに関わるトランスフェリンレセプターの発現量をフローサイトメトリー法で測定することとしました。

■研究の進捗

今回行った研究では、フローサイトメーターを用いて、成人の末梢血からRNA含有量の違いにより、網赤血球を識別し、さらには抗ヒトCD71陽性PE標識抗体を用い、CD71陽性細胞をgatingすること(2カラー分析)が可能であるという結果を得ることができました。この結果から、早産児での測定にも速やかに取り掛かることが可能となったと考えております。

■今後に向けて

今後はこの研究結果をもとに、早産児におけるトランスフェリンレセプター発現量の測定法プロトコールを作成し、早産児の末梢血を用いた研究を進めていきたいと考えております。本研究を推し進めることは、早産児に対するより安全な鉄剤投与法の開発に繋がり、最終的には神経学的予後の改善に繋がるものと考えています。

■寄附者様への謝辞

この度はご支援を賜り誠に有難うございました。私のような若手研究者は、実績もない中で研究費を獲得することは難しく、思うように研究を進められないのが現実です。その中で、このような研究活動助成事業は若手研究者が研究を押し進める原動力となることを実感いたしました。この度のご支援に対し、少しでもお応えできるよう今後も努力していききたいと思います。

国際学会等派遣事業

本学の若手研究者（大学院学生を含む。）の国際学会等への派遣を支援します。

支援を受けた研究者の声



若林 尚宏

外科（心臓大血管） / 助教

学会名：第10回日独血管外科学会

開催国：ドイツ

■学会での発表内容・成果等

この度、ドイツで開催された第10回日独血管外科学会に参加する機会を得て、旭川医科大学基金からご支援を頂きました。本学会は2年度に1度ドイツと日本が交互で主催し、血管外科領域の幅広いテーマに関する研究交流を目的とする会です。全体の参加者は50人程度と然程多くはありませんが、日独の専門家がオープンに議論し合うため、若手にとって非常に勉強になる会であり、また、原則的に英語で行われるコミュニケーションは、若手にとって最適な機会でもあります。私の発表は、急性大動脈解離という疾患において、頭頸部への進展を伴う場合の新しい手術法に関するものでしたが、新しい方法を積極的に受け入れる土壌のあるドイツの方々からは、適応や至適な方法に関して活発な議論・意見を頂き、非常に有意義な発表となりました。

■今後に向けて

自分のような若手にとって、国際大会での発表は敷居が高く、準備等も大変ではありますが、一方で得るものは極めて多いと感じます。この報告書が若手の海外活動への挑戦のきっかけとなれば幸甚であり、自分自身も今回の経験を活かし、旭川から世界へ発信できるよう今後も精力的に研鑽していききたいと思います。

■寄附者様への謝辞

本機会のような海外での活動に際し、旭川医科大学基金からの支援は、資金面でのみならず精神面でも大きな後押しとなると感じました。この度の国際学会等派遣事業でのご支援に対し、心からの御礼を申し上げます。ありがとうございました。



別所 瞭一

第二内科 / 医員

学会名：第78回アメリカ糖尿病学会

開催国：アメリカ

■学会での発表内容・成果等

平成30年6月21日から平成30年6月25日まで、フロリダ州オーランドで開催されたアメリカ糖尿病学会(American Diabetes Association 78th Scientific Session; 以下ADA)に参加しました。ADAは糖尿病および糖尿病合併症領域における世界有数の規模の学術集会であり、世界各国より研究者・臨床スタッフ・患者が集い活発な議論が行われました。私は、6月23日に“Luseogliflozin Inhibits HIF-1 α Expression in Renal Proximal Tubular Epithelial Cells”(ルセオグリフロジンは近位尿細管細胞におけるHIF-1 α 発現を抑制する)というタイトルで、新規糖尿病治療薬であるSGLT2阻害薬による新しい腎保護作用機構についての口頭発表を行いました。発表では複数の質疑とコメントを頂戴し、各国の専門家との充実した学術交流の場となりました。

■今後に向けて

今回、初めて国際学会での口頭発表を経験し、質疑応答に対応する十分な英語力を身に付ける必要性を痛感しました。また、重要な研究成果の発表においては、どの発表者もスライド・話し方ともに、プレゼンテーションの構成がとても優れていることに気が付きました。今後も、興味深い研究成果を生み出せるよう精進するとともに、英語力・プレゼン力を磨いていきたいと思います。

■寄附者様への謝辞

学会発表で得られた質疑やコメントを加味し追加実験を行い、令和元年9月に論文が受理されました(Bessho R et al. Sci Rep 2019; 9: 14754)。日頃、十分とは言えない研究費をやりくりする中で、国際学会のための滞在費・渡航費を支援していただけたことは非常に励みになり、研究を続けるモチベーションにもつながりました。この場をお借りして、寄附者の方々に深謝いたします。

旭川医科大学医学部医学科同窓会40周年記念助成事業

旭川医科大学医学部医学科同窓会40周年記念行事、学生の活動並びに大学における教育、研究及び診療を支援します。

旭川医科大学医学部医学科同窓会 創立40周年記念事業を終えて

原 保明

旭川医科大学医学部医学科同窓会 会長

旭川医科大学医学部医学科同窓会は、1979年(昭和54年3月)に、会員相互の親睦を図るとともに母校の発展に寄与することを目的として、第1期生の卒業と同時に誕生し、今年になって創立40周年を迎えました。その記念事業として、創立40周年記念式典・記念フォーラム・記念祝賀会を8月3日(土)、星野リゾートOMO7旭川にて開催いたしました。同窓会会員の他、これまで本会を支えてくださいました皆様や学生会員など、180名を超える皆様にご臨席を賜り、盛会のうちに終えることができました。

記念式典ではご来賓として西川将人旭川市長、長瀬清北海道医師会会長、山下裕久旭川市医師会会長(代読:滝山義之同窓会副会長)よりご祝辞を賜りました。続く記念フォーラムでは、「同窓会40年のあゆみ」を私よりご紹介させていただき、併せて歴代同窓会長・副会長へ感謝状を贈呈致しました。また第6期生の千葉大学大学院医学研究院環境生命医学教授 森千里先生により、「旭川医科大学卒業後35年のMission & Passion—解剖・発生学の基礎研究から社会医学・国際拠点活動へ—」と題して学生時代のお話から卒業後のご活躍などについてご講演いただき、さらに、吉田晃敏学長(第1期生、初代同窓会長)より「旭川医大の未来展望」と題してこれからの医療を見据えた旭川医科大学のチャレンジや展望についてご講演いただきました。



1. 同窓会40周年ポスター 2. 会場のOMO7旭川 3. 西川将人氏(旭川市長) 4. 長瀬清氏(北海道医師会会長) 5. 滝山義之氏(旭川市医師会副会長) 6. 式典の様子 7. 司会の東副会長、山本副会長
▶右ページ 8. 感謝状贈呈 9. 森千里氏(第6期生) 10. 吉田晃敏学長(第1期生) 11. 祝賀会でパフォーマンスをする室内合奏団とCRANK!のみなさん 12. 東医体優秀成績者 13. 14. 祝賀会の様子 15. オリジナルボールペン

記念祝賀会では、歴代会長・副会長の皆様からご祝辞、祝杯・乾杯のご挨拶を賜りました他、学生時代に東日本医科学学生体育大会(東医体)で3連覇以上の成績をおさめられた会員(個人表彰:9名、団体表彰:3団体)をご紹介させていただき、同窓会として表彰致しました。また、現役学生のクラブ活動からは室内合奏団にBGM演奏を、ダンス部CRANK!にパフォーマンスをご披露いただき、出席した皆様の歓談に華を添えていただきました。

この度の40周年記念事業につきましては、私が会長に就任いたしました2017年より本会役員を中心とした40周年記念事業実行委員会にて準備を進めてまいりました。40年前の本会発足時には76名だった会員数も、現在では5,000名を超えるまでに大きく成長致しております。今後の益々の発展を考え、40周年記念事業として、新たに同窓会支部を全国各地並びに米国・欧州に創立し、全国・全世界の本学卒業生の活躍をサポートしていける組織づくりを進めています。このほか、本学の学章とロゴマークを刻印したオリジナルボールペンも製作・販売し、収益金を大学へ寄附することで在学生の支援等にご活用いただけるよう考えております。

これら同窓会創立40周年記念事業を成功裡に終えることができましたのも、旭川医科大学基金を通して旭川医科大学同窓会40周年記念事業へ多くのご寄附を賜りましたことによるものと衷心より感謝申し上げます。本事業のためにと同窓会員の皆様からお寄せいただいたご寄附は本年度発行の同窓会誌第37号:同窓会創立40周年特集号の制作・印刷費として活用させていただきました。残金は旭川医科大学基金が支援する母校の修学支援事業や教育支援事業、地域医療支援事業などにご活用いただくように致しました。

今後も旭川医科大学の発展のため、同窓会を挙げて活動してまいりますので、変わらぬご支援並びにご高配を賜りますようお願い申し上げます。



旭川医科大学基金「感謝の集い」の実施

平成30年11月27日に旭川医科大学基金の寄附者の皆様をお招きした「感謝の集い」を旭川医科大学病院内のレストランなかまどを会場として開催しました。

平成28年10月の旭川医科大学基金創設後、2回目の開催となる「感謝の集い」には寄附者の皆様とご同伴者を併せ30名の方々にご参加をいただき、本学からは吉田学長を始め、理事、副学長などの大学役職員の他、基金の支援を受けた学生・留学生も参加しました。

はじめに貢献会員・特別貢献会員の皆様へ感謝状を贈呈いたしました。また、吉田学長からグローバルに活躍できる医療者の養成などの、教育・研究等に関する講演の後、原渕学長補佐から寄附金の活用や収支状況などについての報告を行いました。

寄附者の皆様との歓談時には、支援を受けた学生・留学生から活動成果報告が行われ、日ごろのご支援に対する感謝の気持ちをお伝えすることができました。最後に、原渕学長補佐に閉会の挨拶の後、盛会のうちに終了いたしました。



旭川医科大学基金へのご支援のお願い

旭川医科大学基金への更なるご理解・ご支援をよろしくお願い申し上げます。

お申し込み方法：①クレジットカード、コンビニエンスストアでの払込

②郵便振替払込

③大学窓口への直接払込

※詳しくは下記より旭川医科大学基金ホームページをご参照ください。

旭川医科大学基金 検索



お問い合わせ

旭川医科大学総務部総務課広報基金係
〒078-8510
北海道旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号
電話：0166-68-2118
メール：kikin@asahikawa-med.ac.jp

